

【倫理委員会活動報告】

揺るぎなき信念と畏れを知る心 ―原子力発電の推進について考えること―

電力中央研究所 佐藤 清

電気学会倫理委員会

東日本大震災に起因する福島第一原子力発電所の事故を契機として、原子力発電の推進について多くのことが語られてきた。日本の国家としての健全な運営を考えれば、防衛力の整備と共に、エネルギーと食糧の安全保障は不可欠で、そのこと自体は社会的、思想的立場を超えて、大多数の国民の合意を得られるのではないかと思う。

経済的には豊かな社会を実現した日本も、今後は、漸次人口が減少していくことが確実視されており、経済規模を縮小してエネルギー消費量を相当減少させる考え方もあるが、それでも、化石燃料資源に乏しい日本の現状と世界的なエネルギー需要の増加を考えれば、原子力発電に代わる安全性、安定性、経済性に優れた発電方式が開発されるまで、この発電方式は安全に万全を期して温存すべきである。

大事故を経験した日本の原子力発電に国内外から厳しい目が向けられる中で、エネルギー政策の策定、エネルギー技術の研究・開発に携わる人々は、事故から多くを学び、現在・未来世代のために地球環境を最大限保全し、同時に持続的な社会を構築していくためにも、将来のエネルギー源を確保する重要な責務を負っている。だが、真摯に研究・開発を続け、地震多発国における地震や津波等への万全と思える安全対策を講じ、高レベル放射性廃棄物処分の問題に道筋をつけたとしても、絶対的な安全、絶対事故が起らないことを保証することは最終的には誰にもできない。エネルギー安全保障と絶対的な安全性の追求の狭間で、私達はどのように意思決定すべきであろうか。

世界の全体的な構造や歴史の法則に関する厳密な思想的枠組みを強制されない民主主義社会は、ともすれば問題の全体を俯瞰せず、他の問題との関連性にも思いを致すことのない、ある種短絡的な論調や行動に翻弄されやすい。この宿痾への処方箋として、国民の生存に関わる重要な問題については、ポピュリズムを排して、ギルバート・キース・チェスタトンが語った「死者の民主主義（死者をも含めた民主主義）」の理念と、更には未来世代の生存権確保への現実性を踏まえて判断する必要がある。歴史、伝統と未来世代への責務を踏まえた民主主義の寓喩を絵空事に終わらせないための意思決定方式の工夫と、議論に参加するための要件を真剣に考えるべき時である。

今、政策立案者とともに、経営者や科学者・技術者の発言への信頼性が揺らぎ、その社会的責任が問われている。発言する人々の哲学、力量（技量）、人格が問われ、立地地点の人々の前でも語り得る言葉、内容を持ち得るのか、人間としての覚悟が試されている。

1964年から約10年にわたり電力中央研究所の理事・技術研究所長を務めた平井彌之助（1902-1986）は、古巣の東北電力が女川原子力発電所を建設するに際し、1968年に同社に設置された海岸施設研究委員会に参画して、869年に東北地方太平洋岸を襲った貞観地震・津波にも言及し、この規模の津波に備えることを強硬に主張した。委員会では平井の考えを過剰な対策とみる意見が大勢を占めたが、同社の経営陣は最終的に平井説を採用し、敷地の高さをO.P.（女川の工事中基準面）+14.8 m、屋外重要土木構造物や主要建屋1階の高さをO.P.+15.0 mと決定した。40数年を経て来襲した津波の高さ（最高水位）は、敷地の地盤沈下を考慮するとO.P.約+13 mであり、敷地の高さを越えなかった。法令を遵守しながら、法令に定める基準や指針の本質的な課題を常に自らに問い、結果責任を問われる技術最高責任者として責任を果たす使命感をもった人物であった。

1991年から約8年間電力中央研究所の理事長職にあった依田直（1930-）は、在任中原子力委員も務め、日本の原子力政策の形成にも深く関与した。若い頃から木川田一隆の懐刀として仕え、東京電力の副社長時代には電気事業者の中核として原子力ビジョンの検討・策定をリードした。一方で、早くから再生可能エネルギーの役割を認識し、環境派と呼ばれる人々との対話を欠かしてはならないこと、原子力発電を原子力の専門家だけに任せてはならないことを力説していた。エイモリー・ロビンス、ウィリアム・ウォーカー、高木仁三郎といった人々と、敢えて積極的に交流し、立場を超えて人間としての信頼関係を築いた。依田は常々「原子力反対派の話を聴いて、自分と見解は異なるが頷かざるを得ないものがあると思ったら、その事柄に関する自らの見解の拠って立つところを徹底的に検証してみる必要がある。」と語っていた。他者の意見を尊重するこのような謙虚な心のあり方は、必然的に技術が内包する危険性への知覚と自然に対する畏れの感情にも繋がり、豊饒で人間味溢れる思想を形成していた。

原子力発電の推進について考え、人前で語る時、私はいつも二人の先達の揺るぎなき信念と畏れを知る心を想起し、肖りたいと願っている。

■ 本記事は、2011年12月8日に京都大学で行われた電気学会倫理委員会 特別企画講演会の内容「佐藤清、巨大技術に関わる技術者の社会的責任について～東日本大震災時のメディアへの対応を通じて感じたこと～」に 関連するものです。

特別企画講演会の全文は倫理委員会ホームページ <http://www2.iee.or.jp/ver2/honbu/39-rinri/index020.html> をご覧ください。